

# Stage Three

## 「悪霊の森」

「てめえが反乱軍の親玉かあ！」

ジャンセニア湖の支配者、天狼のシリウスは人狼であつた。昼は人間の姿だが、夜は狼に化ける。もちろん並の狼などではない。満月の夜ごとに若い娘をさらひ、食い散らかす牛ほどの半人半狼、それがシリウスの真の姿だつたのだ。

「極上の肉の臭いだけ。てめえは残さず食つてやるから安心して殺されな！」

シリウスが飛びかかつてきたところをグランディーナは曲刀で払つた。毛深い腕が深々と斬られたが、それは見ているうちにふさがつてしまふ。人狼には聖別された武器しか効かない、と言われる所以である。通常の武器への耐性が異常なまでに高いのだ。

「いてえ！ いてえぞ、この女おま!! こんなことをしたらどうなるか、わかつてんだらうな?！」

「ふざけるな！ おまえが食い殺した娘たちの痛み、何分の一かでも思い知れ！」

言うや否や彼女はシリウスに斬りかかった。

「効かねえ！ てめえの武器なんぞ効かねえよ！」

女たちの痛みだと？ てめえら人間は俺様に狩られる獲物よ、おもちやよ、お食事よ！ 獲物の痛み、いちいち考える奴がいるかよ!!」

人狼は空手だが両手の爪と狼の牙が強力な武器だ。

煌々と冴える満月の夜、それは最高の力を備え、鋼の刃さえ軽くはじくほどであつた。

防戦からすぐに攻撃に転じて、矢継ぎ早にシリウスは両手を繰り出した。その速さはグランディーナを上回り、むき出しの腕を傷つけ、胸甲をも易々と引き裂いた。

曲刀一振りでは防ぎきれない。グランディーナは後方に飛びすさろうとしたが、シリウスはこれにも軽々と追いついてみせた。

「あの技を使おうつたつてそうはさせねえ！ 満月の夜にのこのこ一人で来やがつたのが運の尽きよ！ てめえの必殺技があれば、一人でも俺様を倒せるとでも踏んだのかよ?！」

シリウスの攻撃がさらに激しくなつた。

彼女はあつという間に壁際まで追いつめられ、下がり、倒された。

その勢いに乗ってシリウスはグランディーナに馬乗りになる。上半身は狼だが、下半身は人間だからそんな芸当も可能なのだ。

一方の彼女は自身の血で真つ赤に染まっていた。乗られた時に曲刀もはじき飛ばされた。

「さあ、食ってやる。ここまで俺に抵抗できたのはてめえが初めてだ。特別サービスに食い終わるまで、死なねえように気をつかってやるぜ！」

「満月の夜に来たのは、おまえの心臓を抉るためだ、二度と蘇らぬようにな！」

「げげ?! どうしてそれをてめえが知ってやがるんだ！」

シリウスの胸元に細い短刀が突き刺されていた。彼が身を翻すより速く、グランディーナはその首に腕をかけ、短刀の切っ先を抉った。

「てめえ！」

鮮血が口と胸からあふれ出した。

「ろくに抵抗もできない娘ばかり襲っておいて特別サービスが聞いて呆れる。これ以上、人を殺させるものか！」

「ぢぐじょう！」

血を吐き出しながら、人狼は最後のあがきで彼女の

肩口に何度も噛みついた。

二度、三度。

肩当てがなければ、グランディーナの腕は早々と食いちぎられていただろう。その肩当ても最後には完全に壊されて、牙が肩を抉った。

だが彼女は攻撃の手を緩めなかった。

とうとう言ったとおり、心臓を抉り出してしまったのだ。

最後に血の塊を吐き出して、人狼は絶命した。

その下からグランディーナは抜け出す。脱力した人狼の身体は重く、脱出は一苦労だ。二人分の血で床もかなり滑る。

やっと立ち上がると、彼女はシリウスの心臓を握りしめたまま、張り出しまで歩いていった。それは身体の大きさに比例して、牛のような大きざだ。

「グランディーナ！」

呼ばれて振り返るとランスロットとカノープス、それにギルバルドが角灯くわんたんを掲げて立っていた。

しかし、エルズルム城の玉座の間に充満する血の臭いと源に、さすがの三人も一瞬、足を止める。

そこには牛のような大きさの人狼の死体が血の海に横たわっていたからだ。

その隙に彼女は張り出しまで出て、ジャンセニア湖に心臓を投げ捨てた。

真つ先に追いかけてきたのはランスロットだった。

「グランディーナ、なぜ一人で出かけた？ 明日、エルズルム城に攻め込むのではなかったのか？」

「最善と判断した」

「君一人で敵の本拠地に乗り込むことが最善だと言うのか？」

グランディーナは振り返った。

カノープスも張り出しに出てくる。彼は大きく息を吸い込んで伸びをした。

「シリウスは満月の夜に心臓を抉らなければ倒せない。半端なことをするためにジャンセニア湖に来たわけではないからな」

「だからといって、なぜ君一人で来た？ 皆を連れていきたくないというのなら、それでもかまわないが、なぜ誰にも言わなかったのだ？」

グランディーナは張り出しから屋内に戻り、部屋を抜けて廊下に出た。シリウスにはじかれた曲刀も拾っていく。刃こぼれしていないのを確かめて鞘に収めた。

後からランスロットとカノープスが追いつがった。

「連れていけば最初にシリウスと戦うのは私ではな

くなる。かなわないからと降参すれば見逃してくれるような優しい相手だとも思っていたのか？ あなた方の誰一人として満月のシリウスにはかなわない。だから私だけ来た。シリウスによくない人質を与えるような真似もしたくなかった」

彼女の歩いた跡には点々と血がついた。それが彼女自身のものかシリウスのものか傍目には判断できない。「それならば、そうとなぜ言わなかった？ そんなに我々が信用できないのか？」

とうとうランスロットはグランディーナの肩に手を置いた。半分乾きかけた血の感触だ。

「離せ、ランスロット」

「先に質問に答えてからだ」

「そこはシリウスに噛まれたところだ。離せ」

「すまない。痛むのか？」

「当たり前だ」

「それでどこへ行くこうつていうんだよ？」

いままで黙っていたカノープスが口を開いた。

「血を流す。このままでは野営地には戻れない。

ギルバルドはどうした？ 一緒に来ただろう」

「さすがに目ざといな。ギルバルドならマチルダを呼びに行ってるよ。血を流したって人狼にやられた傷

をそのまま放つて帰るわけにはいかねえだろう？」

「騒ぎ立てるほどの傷でもあるまい」

「リーダーが怪我したとあっちゃ、そうも言つたらねえだろうが」

三人が外に出ると東の空から明るくなり始めていた。煌々とした満月が空に浮かぶ。

グランディーナは真つ直ぐに井戸のある裏庭へ向かった。

城とは言つてもエルズルム城はペンシャワールにあつたギルバルドの屋敷とそう違わぬ大きさだ。

井戸が見つかるのと彼女はすぐに服と胸甲を脱ぎ捨てた。血にまみれたそれらは、傍目にも使い物にならなくなっているのがわかる。かろうじて形が残っているのは、左の肩当てぐらいだ。

それといつも髪を縛っている手巾はんかちもほどいた。赤銅色の髪が広がって、一瞬、翼のように見える。

カノープスはそれほど近づかなかつたが、ランスロットは生真面目な顔で井戸までついていった。

「水をくんで、かけるのを手伝おう。いくら君でもそれまで拒否はしないだろうな？」

「助かる」

カノープスが二人に背を向けるとすぐに、水を流す

音が聞こえてきた。それに混じって交わされる会話も。ランスロットの声音は先ほどより怒気を感じさせなくなっている。どちらかというところ、カノープスにはため息に近い感じに聞こえた。

「さっきのわたしの質問に答えてくれないか、グランディーナ？」

「話せば同じことだ。言えば、あなたたちは私一人では行かせなかつただろう。だから一人で来た」

「シリウスを昼間に倒し、夜になつてから心臓を抉るとか、手段はあつたのではないのか？ その可能性もなかつたと言うのか？」

「昼間倒しても夜になれば奴は蘇る。その時、奴を束縛できるような手段があつたとは思えない。逃がせば被害者は増える。満月の夜に倒すのが最善の策だ」

「確かにあの大きさはドラゴン並だ。だからといって、君以外に倒せないような怪物だつたとは信じがたい。もつと安全な策があつたはずだ」

そこへ、ギルバルドとマチルダⅡエクスラインがワイバーンのクロヌスに乗ってやってきた。

事情を聞かされたらしいマチルダは、いささか青ざめた顔だ。クロヌスを降りるなり、グランディーナに走り寄つた。

治療が始まると男三人は手出し不要だ。ゼテギネア大陸では男性が治療職に携わることとはとても珍しい。ほぼ女性の独壇場と言ってもよかった。

「どうして、こんな傷を負われたんですか？」

「シリウスに噛みつかれた。そう大騒ぎするような怪我じゃあるまい」

「とんでもない！ 全治一ヶ月の大けがです！

すみません、どなたか、余分なマントなど、お持ちじゃありませんか？」

「俺はない」

「わたしもありませんな」

カノーブスもギルバルドも身軽が身上だ。二人は即答し、グランディーナを除いた皆の視線が自然とランスロットに集まった。

「あいにくとわたしもマントは置いてきてしまった、急いでいたものだから」

彼が剣だけ帯びてきたのは騎士の倣いだらう。

「エルズルム城でカーテンをはがしてくれればいい」  
そう言つてグランディーナが立とうとするのをマチルダは強硬に押し止めた。

「動かないで！ どなたか行つてきてください！」

それでお使いに立つたのはカノーブスだ。

「なぜシリウスと？ 今日、攻めるのではなかったのですか？」

「同じ話を何度もするのは面倒だ。帰つてから皆に説明する」

マチルダはきつく睨んだが、グランディーナは意にも介さない。痛いとは言つたものの、上半身を包帯に巻かれた身とは思えないような落ち着き払いぶりだ。

「君はそれが最善の策だったと言うんだな？」

「そうだ。解放軍に犠牲者は出なかった。まだ文句があるのか？」

「言い分はわかるが納得できない。なぜ君がいちばんの危険を冒さなければならぬんだ？」

グランディーナはいきなり立ち上がった。

「剣を抜け、ランスロット。頭でわからなければ身体でわからせてやる。私と立ち会い」

「そんなことは駄目です！ せつかくの治療が無駄になります！」

「口を挟むな。ギルバルド、あなたもだ。」

どうした？ 剣を抜け」

「それはできない。わたしは君に剣を捧げた。騎士として、その君に剣を向けることはできない」

「ふざけるな！」

彼女は曲刀を抜き放ち、ランスロットの首筋に突きつけた。

「そんな戯言たわごとに付き合えるか。剣を抜け」

「不満があるのならば斬りたまえ。わたしも自分の信条に背いてまで君に仕えたいとは思わない。わたしは騎士だ。誰にもそれを曲げることはできない。さあ、どうした？」

グランディーナはしばらくランスロットを睨みつけていたが、しまいには曲刀を取めた。少しだけ表情が和らいでいる。

「頑固者だな。あなたは人間である前に騎士でありたいのか？」

「それが信条だ。斬らないのか？」

「斬る気などない。私も頑固者は嫌いじゃない」

そう言いながら彼女はまた井戸にもたれて座り込んだ。それだけの動きで包帯に血がにじむ。

「お二人ともいい加減にしてください。治る怪我も治らなくなります」

マチルダは小言をこぼしながら包帯を変えようとしたが、グランディーナはそれを手で制した。

「いちいち治るのを待っていたら戦場では置いてきぼりだ。包帯を無駄にすることはない」

そこへカノープスが戻ってきた。贅沢な厚手の生地を使ったカーテンを抱えている。

ジャンセニア湖はもとと旧ゼノビア王国の貴族たちが避暑地に使っていたところだ。小振りながらエルズルム城の贅沢さはギルバルドの屋敷どころかゾングルダーク城も及ばない。

「なあ、シリウスの奴、化けやがったぞ」

「どういう意味だ？」

「上の張り出しから入ったら、奴の死体があんな怪物じゃなくて貧相な人間になったのさ。あれじゃあ、誰もかなわなかったなんて言っても信用されないだろうな。まるで新兵さ」

「信用されなくてもかまうまい。我々は確かに奴の姿を見たのだからな」

ランスロットが答えるとギルバルドも頷いた。  
「戻るぞ」

じきに彼女らは二頭のワイバーンに騎乗して、解放軍の野営地に向かっていた。

ランスロットとカノープスが小柄なクロヌスに乗り、グランディーナ、ギルバルド、マチルダが大きいブルートーンに乗った。カノープスとギルバルドがそれぞれワイバーンの手綱を握る。

「何、へまやらかしたんだ？」

「なぜわたしに訊くんだ？」

「あそこにいたなかで、あいつを怒らせるようなことができるのはおまえ以外にいないだろうが。あいつの肩口に血がにじんでいたぞ」

「シリアスのことでもめただけだ。なぜリーダーがいつも危険を冒さなければならぬ？　だがその考えが彼女には気に入らなかつたらしい。剣を取れと言われたが断つた。大した動きをしたわけではないが、出血したのはその時だろう」

「どっちも頑固だねえ。実際あんな化け物を見たら、かなうかどうか自信はない。おまえ、勝てるのか？」

「ランスロットは一瞬つまつたが、すぐに勢い込んで言った。」

「剣でかなわなければ魔法という手もあるだろう。リーダーがあんな傷を負うことはないんだ」

「いいんじゃないの、無事だったんだから。おまえの気持ちもわからなくもないが心配しすぎだぜ」

「剣を捧げた者を守ってこそその騎士だ。わたしたちの方が守られていてどうする？」

「野営地が近づいてきていたが、カノープスの視線は平行して飛ぶグランデーナの方に向けられた。その

眼差しは眼下のジャンセニア湖に向けられている。

「あいつの性分なのさ。他人が傷つくぐらいなら自分が前線に立ちたいんだろう。リーダーには向かねえ性格だなあ。まあ、自分は安全圏にばかりいたがるリーダーつてのも俺は好きじゃないが」

「リーダー自ら戦えば皆の士気は上がるものだ。だがこの場合、問題なのは、彼女が自分の功績を人目につかぬように済ませてしまいたがるということだ。足手まといだという印象を与えられても、ついていく者はなかなかいないよ」

「眉をひそめたランスロットのおでこにカノープスが拳を軽くぶつけた。」

「馬鹿言うな、それを補佐するのが俺たちの役割だろうが。守つてやりたいなんておまえの自己満足、胸の中にしまっておくんだな。あいつはおとなしく守られていようなたまじやないさ」

「それは、リーダーなどという大役を彼女に押しつけたからか？　さつき初めて生身の彼女に触れた。二〇歳そこそこの娘とは思えないような堅い身体に、傷痕がたくさん残っていた。戦の傷だけじゃない、拷問とわかるような傷もだぞ」

「それはあいつが傭兵だったからだろう。たとえ女



だろうと戦場にいれば無傷ではいられないさ。あんな身体、一年やそこらでできるものじゃないしな。それにたとえ押しつけられたとしても、受け取った以上、リーダー云々なんて弱音は吐かないと思うがね。担ぎ上げたおまえやウオーレンにだって、それぐらいの覚悟がなかったとは言わせないぞ」

と、カノープスはひとつ咳払いをした。

「それにしても、おまえが女の身体を知っていると  
は思わなかつたよ。すまん、見損なつていた」

「馬鹿を言うな。妻が二年前に亡くなつたんだ。それ以来わたしは一人暮らした」

「悪いことを言つたな」

「気にするな」

ランスロットとカノープスのあいだに笑みがこぼれる。クロヌスは野営地目指して急降下していった。

一方、プルートンの上では大した会話はなかつた。怪我人に気を遣いようにもワイバーンに三人も騎乗することはあまりない。

プルートンを操るギルバルドが一つの騎乗鞍、いちばん慣れなマチルダがもう一つの鞍に座つて、グランディーナはその前でじかにワイバーンに乗つた。

やがて二頭が野営地に着陸するころには、皆はずつ

かり目を覚ましていた。

いつも食事の支度をするマチルダが留守でも、ユーリアとミネアノッドを中心に女戦士の二人も手伝つて事なきを得たらしい。

「着替えてきませんか？」

降りる直前にギルバルドが訊ねた。

「先に話す。着替えるのは移動しながらできる」

皆の前に立つたグランディーナがカーテンを身体に巻きつけ、怪我也も負つてることがわかると、一同は騒然となつた。

「いったい何があつたのですか?！」

「シリウスを倒した時にやられたものだ」

「シリウスならばこれから攻撃を仕掛けてしとめるのではなかつたのですか？ 昨日の軍議でそう決まつたはずでは？」

「シリウスが人狼であることは話したな。奴の力は夜になると増大し、昼間はただの人間と変わらない」  
「ジャンセニア湖に伝わる人狼伝説ですね」

「だがその伝説には皆に話さなかつた続きがある。人狼の力は月の満ち欠けに左右される。同じ夜でも新月の時が最も弱く、満月の時が最も強い。昨日がその満月だ」

「わざわざ最強のシリウスと戦ったと仰るのですか？ 何のためにそんな危険を冒したのです？」

「人狼を倒すためには満月の夜に心臓を抉らなければならぬからだ。昼間に奴を倒してもすぐに蘇る。そうすればまた同じことを繰り返しただろう。ジャンセニア湖に来たことが無駄になる。だが満月の時のシリウスにはあなた方ではかなわない。だから私一人で行った」

「ランスロットたちは何をしに行ったのです？」

「彼女を迎えに行った。シリウスは牛のような大きさの怪物だったが心臓を抉られて果てていた。残念だが、さらわれた娘たちは皆、奴に食い殺されたようだ」  
牛のような大きさの怪物と言っても、とつきに想像しにくかったのだろうが、ランスロットの説明に驚きは徐々に広がった。

「今日はポグロムの森に向かう。以上だ」

グランディーナが動くとその場は解散となった。ランスロットの心配していたほど、皆の反発は起きず、むしろ話に出たような怪物とやり合わずにすんでほっとしているといったところだろう。

移動を告げられてそれぞれが支度を始めるなか、ランスロットは朝食も食べずに人捜しだ。

「アレック！」

「何でしょうか？」

雑多な人びとの交わるなかで、若い騎士はすぐに見つかった。ランスロットがグランディーナに同行してバハーワルブルに行った時以外、アレックはフロールニスはいつも彼と同じ部隊だ。

「カリナを見なかったか？ 君とカリナに話があるんだが」

「彼なら魔獣たちのところでしょう。魔獣軍団にいただけあって魔獣の面倒がいいようです。ロギンスのグリフォンもヘルハウンドも手なずけられたらしいですよ」

アレックの言ったとおり、カリナはストレイカーはすぐにグリフォンたちのなかに見つかった。

最初はグリフォン一頭にヘルハウンド一頭だった解放軍も、シャローム地方でグリフォン二頭、コカトリス二頭、ワイバーン二頭の加入で魔獣部隊が賑やかになったのだ。

ギルバルドを筆頭にロギンス、ハーチ、ニコラス、ウエルズと魔獣使いも増えたが、なりの大きい魔獣の世話をするのは楽じゃない。

カノープスに、いつの間にかグランディーナと一緒に

に行動していて割と手すきのカリナが手伝いに加わっていたのである。時々ユーリアも顔を出しているようだ。有翼人は魔獣と相性がいいらしい。

「カリナ、ランスロットさまが君とわたしに話があるそうだ」

「何だい？」

「アレック、君に部隊のリーダーになつてもらい、カリナが部隊に加わってくれ。わたしはいまのカリナの立場と交替したい」

「リーダーは承知してるのかい？ それに俺のシューメーはどうするんだよ？」

「シューメーはわたしが借りたい。駄目か？」

突然のランスロットの申し出に、アレックとカリナは顔を見合わせた。

「俺はかまわないけど、あんたは？」

「グランディーナ殿は承知されていますか？」

「させる。放っておくと何をするのかわからない。一緒にいた方がまだましだ」

ランスロットも思わず本音が漏れた。カリナはともかくアレックとの付き合いは長い。気心の知れた仲間とも言いたいことも言ってしまうものだ。

「わかりました。オーサたちも不平は言わないで

しよう。行こう、カリナ。皆に紹介しないとな」

「なんか、いまさら照れくさいなあ」

「馬鹿言うなよ」

去っていく二人を見ながらランスロットは密かに拳を握りしめ、今度はグランディーナを探した。

彼女も見つけるのは簡単だった。

解放軍の消耗品は一切合切がウォーレンの担当なのだ。彼女はそこで服と鎧を選んでいった。

「気に入ったのがなければ、ガジアンテップで購入していつてはいかがですか？」

「服など着られればいい。無駄な時間をとるな」

髪だけは井戸端で洗った手巾で結んでいる。

その手巾を捨てたと思っていただけに、ランスロットにはそれが意外に写った。

「グランディーナ、わたしの部隊はアレックをリーダーとし、カリナが入る。わたしはシューメーと君の側にいることにする」

「いつからだ？」

動きやすさだけで選んだのであろう男物のシャツとズボンを手に、彼女は巻きつけていたカーテンをランスロットの手に押しつけた。

「ま、待て！」

ランスロットが慌ててカーテンを開いて彼女を隠す。傭兵とはいえ、ここまで羞恥心をなくすものか、彼は想像もしていなかった問題に少々頭痛を感じる。それにエルズルム城で見た血の染みも広がっているようだ。

「たつたいまからだ。反対しないのか？」

「してもついてくるのだろう。するだけ無駄だ」

ウォーレンは少なからず驚いたようだ。

グランディーナの回答にかランスロットの行動にかおそらくはその両方にだろう。

思わぬ返事にランスロットは胸をなで下ろした。

彼が自分の考えの甘さに気づくのはじぎのことであつた。

ジャンセニア湖を発った解放軍がイグアスの森、通称ポグロムの森に着いたのは白竜の月に入った日のことだ。

ポグロム、旧い言葉で「虐殺」を意味する名詞でこの森がそんな名前で呼ばれるようになってから、二四年経つ。

ひとまずマトグロッソの近くに野営地を設置した解放軍の面々は、誰もが複雑な顔で南西に広がる森を見

つめた。

街道はこの森を迂回して、南西のゼノビアに続く。一同がヴォルザーク島を離れてからまだ一ヶ月も経っていない。その時間の速さと、この森でかつて行われた大虐殺を思っているのだろう。

「ポグロムの森のことはご存じでしょうね？」

「知っている。二四年前の戦いでゼノビア城から逃れた人びとが帝国に降伏しようとして許されず、ここで焼き討ちにあつた。森は一日で焼け野原と化し、虐殺の首謀者は帝国で主要な地位に就いている。それ以来、誰も元の名では呼ばなくなつた。ポグロムという名前が定着した」

昼間でも暗澹あんたんとした森を見つめるグランディーナの表情はいつもと変わりがない。

「だが、ここ数年で森は急速に復興した。その勢いは近隣のマトグロッソやバイアも呑み込みそうなほどだ。それからだ、悪霊が森の周辺に出没するようになったのは」

「街道はこの森に沿って続いています。あえて森を攻めなくてもよいのではありませんか？」

「話そう。リーダーは集まっているか？」

「待たせてあります」

魔獣たちも落ち着きがないようだ。悪霊が昼間からうろつくという森だ。その雰囲気は魔獣の方が敏感に感じ取っているのだろう。

そのなかで、ユーリアのグリフオン、エレボスは割と落ち着いていた。身体の大きさからいっても、エレボスは魔獣たちのリーダーのような存在だ。

解放軍の誰もが落ち着かず、野営地の設営はのろかった。だが、なかにはこの森で家族を殺された者もいるはずだ。しばらくは重苦しい雰囲気が続きそうであつた。

グランデイナーナは集まったリーダーたちの前に一枚の地図を広げた。

ポグロムの森はゼノビアの北東に広がる大きな森である。旧ゼノビア王国の版図に含まれていたが、その大きさのために開拓はほとんど進まず、人が住んでいるのは街道に沿ったマトグロツソ、ロライマ、アラゴアス、ロードニア、マラニオン、それにバイアだけがゼノビア領だつたと言っても過言ではない。

だが地図には彼らの知らぬ地名がマラニオンの南西に加えられていた。

「見てのとおり、ポグロムの森は街道沿いに町があるだけのところだ。かつては森の端にセルジツペ、ミ

ナスシエライスという都市もあつたが、例の虐殺時にどちらも廃墟と化している。虐殺の影響もあつて、森の開拓はまったく進んでいない状態だ。シャローム地方とゼノビアを結ぶ街道が生命線と言つてもいい。だが、ここ数年、森が急に元の姿を取り戻し、悪霊が周辺に出没するようになった。ゴヤスという町が現れたのは同じころだ」

グランデイナーナがいったん言葉を切ると、皆は思い思いに自分の意見を述べあつた。身内をこの森で失つた者は当然、その魂を安らげせることを願い、一方ではゼノビアを先に攻略すべきだという声も出た。

「ゴヤスは街道から外れているようですが、何かわかつているのですか？」

ウオーレンの問いに皆の視線がまた地図に注がれた。その町のことは完全に関心から外れていたからだ。

「ゴヤスにはラシュデイの三番弟子、黄玉のカペラが住みついていて。悪霊を操っているのもそいつだ。ポグロムの森を素通りすることはできない。ゼノビアに進むのはカペラを倒してからだ」

突然出てきたラシュデイの名に、誰もが言葉を失つたようだ。

しかしグランデイナーナは淡々と話を進める。

「悪霊には通常の武器が効かない。僧侶たちに浄化してもらるか、聖別された武器だけが有効だ。それで今回は軍を展開せず、少数の者で飛行部隊を組んで、カペラを直接叩く。奴を倒せば、死者の魂も解放されるだろう。残りの者はアラゴアスに向かえ。そこで合流しゼノビアに向かう。」

異論がある者はいるか？」

「誰がゴヤスまで参りますか？」

「ランスロット、マチルダ、カノープス、ギルバルド、それに私だ。一人でグリフォンかコカトリスに乗れば移動速度はいちばん速いはずだ。ほかに悪霊と戦った経験のある者はいるか？」

さすがに返事は上がらなかった。もともと、グランディーナが名を挙げた面子でさえ、悪霊との戦闘経験は疑問符のつくところだ。マチルダを除けば、カペラを叩く攻撃力を重視してだろう。

「こちらの指揮はウオーレン、あなたに任せる。ミアニアにもこちらの守りに残ってもらおう」

「了解しました。明日の朝発たれてもゴヤスに着くのは夜になりました。マラニオン辺りで休んでということですか？」

「そうだ。マラニオンまでも強行軍になるだろうが、

ちようどいい拠点がほかにない。カペラと戦うのは明るい時にしたい。

ギルバルド、グリフォンとコカトリスの体調は万全だろうな？」

「いつでも発てましょう」

その時、野営地の一角から悲鳴が上がった。森に面した方だ。

グランディーナはすぐに走り出したが、振り返って一同を怒鳴りつけた。

「マチルダ！ あなたが動けないでどうする！ 皆も遅れるな！」

「は、はい！」

二人の後を皆が追った。

倒れているのは女戦士のシルキィⅡギユンターだ。その上に半透明の黒っぽい長衣が覆いかぶさっている。女戦士のマンジェラⅡエンツォが弓を射た。矢は長衣を突き抜けて地面に突き刺さる。

「悪霊に武器が通用するか！ そこをどけ！」

長衣はグランディーナの方に向き直った。眼のようなもの二つ光る。生者ではないその光を見た者は、背筋がぞつとし、背中に垂れる冷や汗を感じないではいられなかった。

シルキイが呻いた。

グランディーナは曲刀を抜き放つ。

「速く浄化しないか！ 奴に触れられているだけでシルキイの命は危うくなっているんだぞ！」

「はい！」

ミネア、あなたも私に唱和してください！」

マチルダはそう言つて、いつも身につけている十字架を取り出した。ミネアの返事も待たずに浄化魔法の詠唱が始まる。

「聖なる父ファイラーハの慈悲深き御名において命ずる。汝、迷える霊よ、この世のくびきより放たれよ。安らぎを知らぬ魂よ、所在あるべきところの処に還れ！」

真つ白な光が悪霊を包んだ。霊は地の底から聞こえるような低いうめき声をあげたが容易に消え去らない。「何か人為的なものがこの霊をこの世に繋ぎ止めています！ 浄化魔法ではそのものまで消し去ることはできません」

「そこか！」

曲刀が悪霊がいるのとはまったく違う空間に突き出された。そこを通した景色がぶれて、明るい緑色の生き物が現れる。

蝙蝠こつちもりの翼に人とも有翼人とも異なる異形の姿、魔界

の住人、悪魔族であった。

同時に一同は、悪魔の振り降ろした大鎌がグランディーナに届かずにいたのも見た。

曲刀を墨のような体液がつたう。それは彼女の手から地面に緩慢に滴っていた。

「なぜ貴様がここにいる?！」

彼女は曲刀を引き抜くと、悪魔が地面に落ちる前にその身をたたき斬つた。

悪魔は狡猾な笑みを浮かべ、現れた時と同じように消えた。

悪霊が浄化されたのも同時であった。

「速くシルキイの手当を！」

「はい！」

誰もがいまの出来事に啞然としていた。

悪魔の存在などオウガ同様、古のオウガバトルの存在だと思つていたので。ほとんどの者は悪魔を見たのも初めてだった。

だが、グランディーナの曲刀には黒い体液が残っていた。悪魔は消えたが、確かにいたという証拠は彼女の目の前にある。

「シルキイは大丈夫です。数日は安静にしていた方がいいでしょうが、命に別状はありませんわ」

「わかった。オーサ、シルキイを連れていってくれ。マンジエラ、付き添いはあなたに頼む。何かあったらマチルダかミネアを呼べ。あとはユーリアと交替でやつてくれ」

「わかりました」

シルキイとマンジエラは仲のいい娘たちだ。どちらも二六歳で女戦士として弓の腕前を競い合ってもいるし、ガーディナーⅡフルプフの部隊と一緒に肩を並べて戦つてもいる。親友の事故に泣き出しそうな顔をしていたマンジエラも、一段落していつもの明るさを取り戻したようだった。

オーサⅡイドリクスに担がれたシルキイとマンジエラ、それにマチルダが揃つて去つても残つた者はまだ動けなかった。

「なぜ悪魔がこんなところにいたんだ？」

やつとランスロットが言った。

「わからない」

ロギンスが持つてきた水桶で、手と刀を洗いながら、グランディーナは不機嫌そうに答える。

「だがでたらめに現れたのではないだろう。カペラとつながっているのかもしれない」

「カペラと悪魔がどうつながるのです？」

ウォーレンは同じ魔術に携わる者としてそのことが不快そうだ。

「カペラはラシュデイの三番弟子とは言つても、アルビレオに比べると力が劣る。それを補うために悪魔の力を頼んでいるとも考えられる」

「確かにそのような魔術師や妖術師の話も聞いたことはありますが、悪魔がなぜカペラに力を貸す理由がありますか？ 奴らはオウガバトルでは我々人間と敵対した同士です。人間に手を貸すなどあり得ないことではないでしょうか？」

「悪魔はそれほど石頭ではないらしい。要求するものを与えれば、人間とも短期間の契約は結ぶそうだが、カペラに与えられるものがあれば、悪魔も手を貸すだろう」

「それはボグロムの森に彷徨う悪霊ですか？」

突然のエマーソンⅡヨイスの発言に皆がぎょつとしたように彼を注視する。

「確かに悪魔を召喚して契約する方法は存在しますが奴らは価値ある宝物か人の魂、召喚者そのものの命などしか喜ばぬそうですよ。しかしここにはたくさん死者が眠っている。悪魔に差し出すには——」

「それ以上、言うな！」



誰も止める間もなくカシムⅡガダムがエマーソンに襲いかかった。あつという間にエマーソンは地面に倒され、カシムが馬乗りになる。

「俺の両親はこの森で殺されたんだぞ！俺だけじゃない、シルキイだってマンジエラだってそうだ！それをよくも、よくも!!」

「冗談じゃない！どうして僕が責められなけりやならないんだ！僕はただ——」

「やめておけ、二人とも」

取っ組み合いになりかけたところでカノープスが小さく割って入った。

「どっちの言い分も間違っちゃいないが、仲間割れするところじゃないだろう。悪いのは死者の霊を冒瀆するカペラだ、そうじゃないのか？」

「だけど！」

カノープスに頭を撫でられて、カシムは小さい子どものような顔になった。泣き出しそうなのを必死でこらえているのは傍目にもわかるほどだ。

「私の言い方も思わせぶりだった。悪いことをした、カシム」

「いいえ、俺も、かつとしちゃって」

「おまえも謝れよ。知っていても言っただけのことと

悪いことの区別ぐらいつくだろうが」

カシムとは対照的にエマーソンはすねたような顔をしていたが、横を向いてほとんど聞き取れない謝罪の言葉を述べた。

「それで、カペラは予定どおりに明日攻めますか？それとも対策を立て直しますか？」

「予定どおり攻める。さつきも見たように悪魔にはふつうの武器が効く。悪霊よりもよほど戦いやすい相手だ。だが人員は変更だ。マチルダ、あなたが残り、ウオーレンに来てもらいたい。こちらはリスゴー、あなたに任せる。問題はあるか？」

「ゴヤスに向かう途中で悪霊に襲われたらどうするのです？」

「そのためのグリフォンだろう。逃げの一手に決まってる。ほかに？」

「ないようだな」

と例によってランスロットが答える。

「野営地を森から放す。リーダー以外の者で不寝番を立てる。それだけやっておけ。今日は解散だ」

その一言で皆が散った。

「君は悪魔と戦ったこともあるのか？」

「初めてだ。おかしなことを訊くな」

「あの時、まともに動けたのは君だけだったろう。

だからそう感じた。別におかしなことではないさ」

「悪魔だろうと敵ならば討つ。面倒なのはあの場に現れたのは下級の悪魔だったが、カペラが契約したのがどの悪魔かということだ」

「悪魔にも階級などあるのか？」

「悪魔は魔界の人間のようなものだ。階級があつても不思議ではあるまい」

「それは意味合いが違うだろう」

「同じだ。王族、貴族、平民、下層民、斬つて赤い血の出ることに変わりはない。階級など支配層に都合のいいまやかした。悪魔の階級はもつとはつきりしている。強いか弱いか、それだけだ」

「どちらにしても君にはしばらく前線に立つてほしくないな。悪霊も悪魔も皆が見たんだ。次からは君じゃなくても対処できるだろう。君は今回は傷を治すことに専念した方がいい」

「本当に対処できるのなら任せる」

シリウスと戦ったのがまだ四日前ということもあつて、グランディーナの傷はほとんど変わりがなかった。さつきの動きでも傷口が開いたのは確実なはずだが、

彼女は一日に一回しか包帯を取り替えさせない。

「言われなくても何とかしてみせるさ」

ランスロットはそう言い張つたが、グランディーナの表情は変わらなかつた。

やがて就寝の時間が近づくと、誰からともなく、いつもは散つて寝るところを、今回は皆が集まって寝ようという話が出た。真ん中にマチルダとミネアを置いて、ほかの者が同心円上に輪を作るのだ。いちばん外側には当然不寝番が立つ。

グランディーナも反対せず、外周に近いところに場所を占めた。ランスロットとカノープスがその近くを固める。

「横にならないのか？」

とカノープス。そう言つてる彼ら有翼人だつて、半身を起こした姿勢で寝るのが当たり前だ。

「私はこの方が慣れてる」

「寝てる時まで武器を身につけてるのもか？」

「何かあつた時に武器を探していたのでは遅い」

「そのための見張りなんだがな。おまえ、根本的に集団生活に向いてないだろ？ どうした？」

突然グランディーナは立ち上がった。

彼女が人払いして一人になりたがることのあるのをカノープスはランスロットから聞いている。ウォーレンによれば、たいいていは影の報告を聞くためだという。だがウォーレンとランスロットはこの場にいない。「おい、待てよ。こんなところで人払いなんて冗談にならねえぞ」

だが彼女は立ち止まらない。カノープスが軽くつかんだ手を振りほどき、森の方へ歩いていく。

「グランディーナ！ こんな時に何——?!」

いつの間にか霊が、彼女の周囲に飛び交っていた。

一つ、二つ、カノープスはその数を数えきることができない。霊の姿は不安定ではつきりと見分けられなからだ。

彼の声は何事かと皆が起き出してきた。ギルバルドも近づいてくる。

霊に手を出したくないのは皆、似たようなものだ。

「ぼさつと突つ立つてないでマチルダかミネアを呼んでこい！」

誰にもなくカノープスが怒鳴ると、戦士のヴィリー＝セキが血相を変えてシルキイの天幕に走っていった。

そうしている間にもグランディーナの姿はますます

多くの霊に取り囲まれているようだ。

その表情は見えない。彼女は立った時からずっと背をこちらに向けている。

曲刀に手もかけていないところを見る限りではシルキイのように襲われたわけではないらしい。

とうとう意を決して、カノープスは近づいた。友好的な霊がいるのなら、それでもかまうまい。だが何かあつてからでは遅すぎるのだ。それらの霊が突然悪霊に豹変しないとは誰にもわからない。

「やめろ！」

不意に彼女は両手で顔を覆った。

それで彼もつい足を止める。

「やめろ、なぜ私を呼ぶ？ 死者に用はない、去れ、還れ！ 還つてくれ!!」

「グランディーナ?!」

まるで悲鳴のような声音にカノープスは手を伸ばしたが、引き連れた多くの霊とともにグランディーナの姿はかき消すようにいなくなつた。

解放軍の一行が見ている、その目の前で。

「それで見すみす彼女が消えるのを見送つたつていいのか！」

「あの場はどうしようもなかった。悪霊に襲われるのなら、まだ手の出しようもあるが、突然、消えちゃったんだ。そんなこと誰に予想できるんだ？」

カノープスの言い分はもつともだ。

それに有翼人は魔法に馴染まない。バルタンとレイブンが使う技は、どちらも魔法というより精霊の力を借りたものだ。ホークマンに至っては力押しの一辺倒である。

「霊に連れ去られたということでしょうか？」

ウォーレンの問いにカノープスは首を振った。

「そも見えなかったが、断言はできん。どつちかというと、霊と話していたって感じだ。あいつが霊を拒絶するまで、確におかしくはあったが、険悪な雰囲気じゃなかったからな。だから突然『去れ』なんて言い出して、やばいと思ったら消えちゃったんだ、どうしろって言うんだよ、ええ？」

「馬鹿を言え。霊と話すなど僧侶じゃあるまいし、あり得ることか。なぜその時に割り込んででも止めなかったんだ？」

「何だと?! あくまでもけちつける気か？」

八つ当たり気味のランスロットにカノープスも鎧を手立ち上がった。

ギルバルドが割って入らなければ、二人はそのまま取っ組み合いの喧嘩をしていたかもしれない。

「こんな時に大人げないことではいがある。過ぎてしまったことをあれこれ論争してもしょうがあるまい。これからのことを考えるべきだろう」

ウォーレンもすかさず同調した。この老人は、他人の喧嘩は黙って見てる方だ。一見、人当たりは良いが、意外と意地悪いところがある。

「明日のゴヤス攻めをどうするか、考えねばなりません。ともかく」

そこで彼は言葉を切った。その視線の先にある者に、ランスロット、カノープス、ギルバルドが気づいた。

アラディールカプランが、所在なさそうに立っただけ、皆に頭を下げる。

シルキイやマンジェラがその男前などところを見たら黄色い悲鳴でもあげていたことだろう。

「グランディーナ殿がいらっしやらないようなので、こちらに来ました。お久しぶりです、ギルバルドさま、ランスロット殿」

ランスロットはすぐに頷いたが、ギルバルドの名が呼ばれたことには驚きを禁じ得ない。

もつとも、当のギルバルドは名前を呼ばれたことに

困惑気味のようだ。

「過ぎた話はまたにしよう。なぜここに？」

「黄玉のカペラについて、ご報告に伺ったのです。表に出るのは好きじゃありませんが、そうも言っていないようにしたので伺いました」

「カペラについて、どんな報告ですか？」

アラデイはウォーレンを見た。

相変わらず身軽そうな格好で、今日も忍者装束ではない。影というと誰もが思い浮かべる姿だが、町中などでは逆に目立つのだろう。

「と仰るといことは、あなたがグランディーナ殿の代理ですか？」

「そういうことになりますか」

するとアラデイはウォーレンに短く耳打ちした。

その反応を皆が見つめる。

ウォーレンの表情は最初、怪訝そうなものだったが、突然、意味を察したように青ざめた。

彼が生唾を呑み込むのを長い付き合いのなかで、ランスロットは初めて見た。

「まさか」

ウォーレンがつぶやく。アラデイは何も言わない。自分の仕事はそれで終わりだと言わんばかりである。

「どうしました、ウォーレン？」

しかし、彼はアラデイの方を見た。

皆の視線が影の若者を集まる。なかには彼の立場など理解していない者も少なくないだろう。

「本当ですか、それは？ 見間違いということはありませんか？」

「わたしは事実を申し上げただけです。判断するのはわたしの仕事ではありません」

「何の話だ？」

「ゴヤスに悪魔がいるそうです。それが最上位の悪魔、サタンだと言うのです」

皆の反応はいまいちだった。ただ一人、例によつてエマーソンだけがうめき声を上げて皆の注目を集めた。

「知ってるのか？」

「どうして皆さん、驚かないんですか？ サタンなんて我々のかなう相手じゃない。とんでもない敵なんですよ！」

「だからつてのこのこ帰れるかよ。このままゼノビアに向かったところでカペラを放っておいたら背後から強襲されるだけだぞ」

カノープスの意見はもつともだったが、皆の心情はエマーソンの方に傾いているようだ。

その臆病風に吹かれた雰囲気をランスロットはすぐに察した。そのための影だ。彼らの持つてきた情報は全てが知らされているわけではなかったのだ。

グランディーナが一人で影に会いたがるわけである。それは彼女がいつの間にか築いた、解放軍のリーダーとしての立場でもあった。

「ウォーレン、このまま皆で話していても埒があきません。今日は休んで、明日、リーダーだけで話し合いませんか」

「そうですね。もう遅い、皆も休んでください。見張りだけは忘れないでください」

ランスロットはそれ以上、皆の反応など気にしていなかった。彼はアラディを誘い、その場をそつと離れる。カノープスが察して軽く目配せをした。

「何でしょうか？」

「グランディーナが行方不明になつている。探しても見えないか？」

「森の中で探すのは難しいです。わたしも悪霊に襲われたら対抗手段がありません。できるとは申し上げられませんが。少なくともゴヤスではお見かけしませんでしたか？」

「そうだったな。悪霊に対抗できるのは僧侶か聖別

された武器だけだと彼女も言っていた。君にばかり無理を言つてすまない」

「いいえ。わたしも彼女に戻つてもらえないと失業します。調べられる範囲で探してみましよう」

「頼む、アラディ」

彼は黙つて微笑んだ。それから、ランスロットに頭を下げると、解放軍の野営地からは姿を消したのであった。

ぞつとするような寒さを覚えてグランディーナは目を覚ました。

辺りはまだ暗い。空に瞬く星が遅い時間だと告げている。

彼女がいるのは森の中ではなかった。見知らぬ廃墟に一人きり、放り出されていた。

グランディーナは立ち上がった。

十一夜の月明かりが唯一の灯りである。軽く周囲を見回すと、そこが森にごく近い町で、見捨てられてからずいぶん経っているのがわかった。

焼け落ちた家屋が崩れるように並ぶ。

黒こげの骨がそこかしこに転がっている。煤を払う者も、拾い集める者も訪れたことはないようだ。

「セルジツペか、ミナスシェライスか」

ポグロムの森の地理を思い出しながら、彼女はつぶやく。だがどちらもマトグロツソからはいちばん速いグリフォンでも一時間以上かかる距離だ。

どうやってここに来たのか、彼女は覚えてもいなければ、そんな手段の心当たりもなかった。

何者かに呼ばれて霊に取り巻かれた。それ以上の記憶は苦く曖昧なものだ。あの霊のなかに誰を見たのか、いまの彼女には答えられない。

グランデイナーは曲刀が腰にあることをまず確かめた。だがそれだけだ。解放軍の野営地に戻る手段は皆無に等しく、連絡の取りようもない。いくら優秀な影でも自分を見つける可能性は砂漠の砂粒を見分けるようなものだ。

彼女が森の方に近づいていくと白い影が現れた。亡霊のようにだが悪霊とは違う。野営地に現れた霊に似ていなくもない。

背後から骨の鳴る音が聞こえてきたのもその時だ。

誰一人訪れることも弔うこともなかった廢墟の町に、まだ死者の魂が残っていて、突然ふつてわいたグランデイナーに何か訴えようとしているのかもしれない。

だが、振り返った彼女が見たのは、白い骨の群れで

あつた。

亡霊が手招いて、森の中に移動する。

廢墟からは続々と骸骨の戦士が沸いてくる。グランデイナーは身を翻し、昼間でも悪霊の跋扈する森に亡霊を追って駆け込んだ。

「予定どおりカペラを倒そうぜ。こんなところでぼやつとしていてもしょうがないだろう」

翌白竜の月二日、食事もそこそこに集まったリーダーたちにカノープスはいきなりこう切り出した。

「わたしも賛成だ。昨日のアラデイの話によるとグランデイナーはゴヤスにはいないらしい。彼女が消えたのがカペラの仕業でないのなら、人質になっているということもあるまい」

ギルバルド以外のリーダーたちは積極的な意見に思案顔だ。悪魔はろくに知らなくてもサタンが最上位の悪魔であることで腰が引けるらしい。

「ウォーレン、ギルバルド、グランデイナーが最初にかペラ打倒に決めた人員はカノープスとわたし以外ではあなた方だ。ご意見を伺いたい」

「わたしは意見を述べられる立場ではないと思うが、リーダーの決定に従うとだけ申し上げよう」

そう言ったきり、ギルバルドは腕組みをしたまま微動だにしないが、解放軍の中には彼の存在をよく

口には出さないが、彼が彼は弁解の言葉ひとつ口にしよ  
思わぬ者もいる。だが彼は弁解の言葉ひとつ口にしよ  
うとはせず、ただグランディーナに従うのみであった。

「ウォーレン、あんたは？」

カノープスがランスロットに同調した。

ウォーレンは小さなため息をついたが、ゆつくりと  
頷いた。

「行くも行かぬも好みませんが、このまま座して  
リーダーの帰りを待つより、ゴヤスに行った方がいい  
でしょう。すぐに発たれますか？」

「そうだな。いまから行けば、今日のうちにマラニ  
オンに着くだろう。早速出かけるとしよう」

「リスゴー、あとのことは頼みます。あなた方は予  
定どおりにアラゴアスに向かってください。今晩は泊  
まれるような町もありませんから、くれぐれも気をつ  
けてください。グランディーナが戻ってきた時のため  
にエレボスを残していきます」

「わかりました。皆さんもお気をつけて」

携行用の糧食を持ってウォーレンたちは間もなくポ  
グロムの上空にあった。

コカトリスには魔獣に慣れたカノープスとギルバル  
ドが乗り、ウォーレンとランスロットはグリフォンに  
騎乗した。

二人を乗せている時と違い、コカトリスもグリフォ  
ンも速く飛んでいたが、ポグロムの森は広大である。  
眼下はすぐに森だけとなり、どの町も影も見えな  
くなった。

「ウォーレン、昨日みたいなへまは二度とごめん  
だぜ。人より知識があつてもあれじゃ宝の持ち腐れだ」

「エマーソンに悪気はないんだ。多少は大目に見て  
やつてくれ」

「悪気がないからいいつてもものじゃないが、俺が言  
いたいのはそのうじゃない。まあ、エマーソンにはいろ  
いろと説教してやりたいこともあるがな。」

ウォーレン、アラデイに最初に話を聞いた時点で俺  
たちだけにすれば良かったんだ。どうせゴヤスに行く  
のは俺たちだけだ。行かない連中までサタンがいるな  
んてことは知らなくても良かったらうが？」

「そうですね」

「俺たちはゼテギネア帝国に喧嘩売ってるんだぞ。  
サタンくらいでびびっててどうするんだよ。ラシュ  
デイはサタンより強いかもしれないぞ」



「それは笑えない冗談だな、カノープス」

「サタンが強いのは本当です。奴らは魔界ではリーダーのような存在です。我々の感覚で言えば、將軍や団長のようなものです。デーモンやデビルのような下位の悪魔を従えていることもあるでしょうし、その魔力は星々を操ることもできると言われています。決して侮れるような相手ではありません」

「侮った覚えはないぜ」

カノープスは不機嫌そうな顔で森を見下ろした。

「ちえつ。この森、こんなに広い森だったかな。前にゼノビアに行った時はこの森のことなんてろくに覚えてないのによ」

森の中をグランディーナは走り続けた。鬱蒼うつそうとした森の中では時間の経過もわからない。だがとうに夜は明けているはずだ。

白い亡霊はそのあいだ、一度も止まらなかつた。もう一体、悪霊から彼女を庇うようにかぶさる亡霊もある。そのせいで悪霊は彼女を見失うようだ。悪霊に襲われても撃退さえできないだけにかなりありがたい。だが、ずっと川縁を走り続けて橋が見えてきた時、とうとう彼女は強引に足を止めた。

心臓が、全身が、悲鳴をあげている。特にシリウスに噛まれた肩口が燃えるような熱を帯びていた。

「少し休ませろ！ 目的地がどこだか知らないが何時間、走らせる気だ！」

橋の上にわずかな空が広がる。グランディーナはそこに横たわり、呼吸を整えようと目をつぶった。

「あなたたちは何者だ？ 私に何をさせたい？」

亡霊はかるうじて人の姿に見えたが、話はできないようだ。薄暗い森の中だから見分けられる影は、彼女にわかる言葉を持たなかつた。

「誰かの使い、というわけか。私をミナスシェライスまで呼び出した張本人はそこにいるのか？」

彼女は目を開けた。

亡霊が覆いかぶさっていて、その上を悪霊が通過ぎていく。

悪魔の姿はない。もともと魔界の生き物である。いつもこちらの世界にいるわけではないのかもしれない。それでグランディーナはしばらく身動きしなかつた。そうしているあいだにも、悪霊が二度三度と行き交う。それはまるで何かを探しているようにも見えた。その獲物は森に迷い込んだ生者であろう。

「あれがカペラの差し金だとすると、あなたを使わしたのはカペラに敵対する者か。私たちもカペラを倒そうとしていたのだな。彼らは動き出しただろうか？ 行こう。いつまでも休んでいられる状態ではなさそうだ」

彼女の言葉に呼応するように一体の亡霊がまた先導役となり、一体が庇った。

彼女はまたしても当てる分からぬ目的の地目指して、走り出さなければならなかった。

だがあれぐらいの休憩ではどうも身体は癒されな。動悸はすぐに激しくなり、身体のあちらこちらが悲鳴をあげる。それでも彼女は走り続けた。戦場では動けなくなったらおしまいだ。動きを止めた者から息絶えていく。自らの意志で立ち止まることは自殺行為に等しい。その思いが彼女の足を動かす。

生きることを自ら止めるわけにはいかないのだ。

森がまた闇に包まれようとするころ、朽ちかけた教会の尖塔が視界に入った。

森はまだまだ切れそうにない。人里離れたところに教会は珍しい。ロシユフォル教会のものではないのかもしれないが、グランディーナは最後の力を振り

絞って、その建物の中に倒れ込んだ。

しばらくはそのまま中を見るような余裕もない。人の気配はしないが、いきなり攻撃されても何もできないところだ。やつと息が整ってきたころ、彼女はようやく立ち上がり、何があるのか確認した。

しかし、朽ちかけた教会には誰もいないようだ。そもそも、森全体を焼き尽くす業火から、この建物だけ残ったことさえ奇跡のようなものではないだろうか。

気がつくのと、ずっと彼女を先導していた亡霊の姿はなくなっていた。そもそも、この教会が目的の地だったのかもわからない。建物があると気づいて、グランディーナは亡霊のことなど失念し、ただそこで休みたいと思ってしまったのだ。彼女は扉に近づいた。

「誰だ?!」

人の気配に振り返ると、そこに白い長衣を着た老人が立っていた。いつの間にか建物の中にも灯りがある。

「あなたは誰だ？ 私をここまで来させたのはあなたの差し金か？」

「そうだ。わたしは賢者ポルトラノ、ぜひそなたの力を借りたいと思つて手荒な真似をしてしまった」

グランディーナは彼に近づいた。

ポルトラノは賢者というより隠者のような風情があ

る。だがその手にも眼差しにも、ただ者ならぬ力を感じさせた。

「アナトリアの魔女ババロアからそなたのことを聞いた。理ことわりを知りながら器ではない。ならばその器、わたしに貸してはもらえないだろうか？」

「何をするつもりだ？ あなたがカペラと敵対する者ならば私も喜んで器でも力でも貸そう。だが一つ問題がある。死者が何をしようと言うのだ？」

ポルトラノの表情が歪んだ。その姿が一瞬ぼやけ、また元の形を保つ。

「この森が、なぜボグロムなどと呼ばれるようになったか、そなたも知っていよう？」

「知っている。ゼノビアの貴族だったアプローズ男爵という男が帝国に寝返る手土産に、ゼノビア城から落ちてきた難民を森ごと焼き払ったからだろう。森は一日で焼土と化し、近隣のセルジツペとミナスシエライスも壊滅した。あなたもその被害者か？」

「そうではない。だがわたしにはどうしても器が必要だ。この森を彷徨う霊を利用するカペラを倒さねば、わたしはこのまま消えてしまうことはできないのだ」

「詳しい話を聞かせてくれ。それならば、力になれるかもしれない」

「そなたはそうせざるを得ないはずだ。そなたの仲間たちがゴヤスに向かっている。カペラに力を貸すサタンを召還できねば、返り討ちに遭うことになる」

「何だつて?!」

「彼らは明日にはカペラと対峙することになる。夜のうちにサタンを召還できねばならぬぞ」

「それには時間がかかるのか？」

「話をしながら支度をするとしよう。そなたの手を借りねば準備もできないのだつたからな」

「良からう。取引は成立というわけだな」

「わたしは昔、セルジツペに住んでいた。森の北西にある小さな町だ。だが二四年前、あの事件が起きた。森に逃げ込んだ難民たちは森を焼き尽くす炎から逃れ、ミナスシエライスとセルジツペに至った者もあつたのだ。どれほどの者がたどり着いたかは知らぬ。しかし彼らを庇うことでアプローズの、引いては帝国の怒りを買うことを恐れた二つの町の住人たちは難民に対して扉を閉ざした」

自分の口から知らぬ言葉が出るのは奇妙なものだ。グランディーナの身体はポルトラノの支配下にあつて自分の意志では動かすことができなくなっている。

「ミナスシェライスとセルジツペは、地図の上ではゼノビア王国の版図に含まれていたが、もともと王の威光の届かぬ自治都市だ。あまりゼノビア人同士という意識もなかったらしい。だが、森を焼き尽くした炎は二つの町をも巻き込んだ。逃げ出した者はわずかなものであった」

ポルトラノは話しながら建物の床にずっと魔法陣を描き続けている。

「わたしはあるお方に下界と関わらぬよう命じられていた。セルジツペという辺境の町を選んだのもそのためだったのだが、その時のわたしにできた選択は二つしかなかった。命令を破って一人でも多くの民を助けるか、この身を捨てるかだ。わたしには森を覆い尽くした炎を止める力はなかった。それを操るアプローズや帝国の手も止められなかった。わたしは命令に背いて民を助けることにしたが、行動が遅すぎた。セルジツペは炎上し、わたしもその炎に巻かれた」

不意にグランディーナは凄まじい熱気に取り巻かれたような錯覚を覚えた。次いで身体が炎に炙られ、焼かれる痛みが襲ってくる。

ポルトラノの記憶がそう感じさせたのだろう。だが、視界に入ってきた己の手は、たったいま炎に炙られた

かのように水ぶくれができ、焼けただけ、黒こげになつているところさえあった。

「肉体を失ったわたしは、逆に抑えていた力が開放されるのを感じた。だが抛り所のない意識はいずれ四散するもの。力もただ失われていこう。わたしは民を守ることも、命令を守ることもできなかったのだ。ところが、この森で失われた者たちのなかに生者への恨みから悪霊となった者がいるのをわたしは知った。その経緯を思えば同情に値するが他人に害をなすのを黙って見ているわけにはいかぬ。わたしは彼らを抑えるために、森の中心に立つ、この教会跡にやってきた。ここで神を祀らなくなつて久しいが、森の要に当たる重要な位置だ。力しか持たぬわたしでも悪霊を抑えることはできるだろう」

グランディーナの痛みが引いた。手の火傷の痕も消えている。肉体を失ったポルトラノにとつて記憶はあくまで記憶なのだ。

「だが、抑えているだけでは何にもならない。彼らを召還できねば、この世に逆<sup>まみ</sup>に縛りつけられ、聖なる父に見えることも許されまい。しかし人の足は遠のいてしまったし、わたしはこの森から離れることができない。せめてギゾルフィかタルトに連絡ができればと

思ったが、それもかなわない。それから何年も経った。悪霊は消えず、外の世界も変わらず、無為な時間だけが過ぎた」

ポルトラノの手が止まった。

「肉体を失ったわたしには時間の概念が希薄なのだ。が、何年前かに、カペラがこの森にやってきた。奴はこの森を彷徨う悪霊を捧げて魔界からサタンを召喚して力を手に入れた。わたしの抑えが効かなくなったのだ。だが奴らはまだわたしの存在に気づいてはいない。悪霊を思いどおりに操ることなどサタンの力をもつてしても難しいことだ。抵抗があるぐらいにしか考えていないだろう。だが事態が悪化したのも事実だ。そこへそなたたちが現れた。聞けばババロアが藍青石の板をそなたに渡したという。乱暴な手段だったが、サタンを召還するためには、どうしてもそなたにこの教会へ来てもらわねばならなかったのだよ」

グランディーナは魔法陣を描く前に曲刀を外し、鎧を脱いでいた。いまの彼女は裸足で、一切の金属を身につけていない。

ポルトラノはグランディーナは魔法陣の中央に進み出した。

両手を高々と掲げると手の指先から足の指先まで自

分のものではない力が満ちた。

「退去せよ。悪しき霊よ。己が世界に戻れ。

地獄より来りし者、夜を旅する者、

昼の敵にして闇の主、

犬の遠吠え、流された血を喜ぶ者、

影の中、墓場を彷徨う者、

数多の人間に恐怖を抱かしめる者よ。

退去せよ。退去せよ。退去せよ。

我は汝を召喚せざる者なれど、

聖なる父の御名と慈悲深き女神の御名において

我、汝を縛りつけし契約を解かん。汝を召還せん。

退去せよ。退去せよ。退去せよ」

ポルトラノは怒鳴っていたわけではなかったが、その声は朗々と辺りに響き、建物を突き破って森中に届いたかと思われた。

真東に踏み出して、同じ呪文を詠唱する。その次は

真南、その次は真西、最後が真北に向かつてであった。

真北に向かつて呪文を唱え終え、背後を振り返ると、

そこに灰緑色の体色の悪魔がいた。自身の身長より高

い大鎌を持っているが、威圧感野営地に現れた悪魔

とは比べものにもならなかった。

「邪魔をするな！」

それだけ言つて悪魔は鎌を振りかざして襲いかかつてきたが、ポルトラノの詠唱は止まない。防御しようともせず、ただ呪文だけ唱え続けている。

「退去せよ！」

その一言とともに悪魔が消え去り、同時に魔法陣の光も薄れていく。

またグランディーナは、ポルトラノの支配から逃れたことにも気づいた。

「成功したのか？ 前置きが長かった割に呆気なかったようだ？」

そう言いながら、彼女が一步踏み出すと同時に全身を疲労が貫くのを感じた。足腰が立たないのは二日も眠つてないからだけではないだろう。

「カペラが次の悪魔を召喚するには時間がかかろう。いまのうちならば、そなたの仲間たちにもカペラは倒せよう。どうかしたのか？」

「見てのとおり動けそうにない。器を貸しただけなのに魔法を使うのはこんなに疲れるものなのか？」

ポルトラノはわずかに微笑んだ。

「そなただから疲労するだけで済んでいる。力のない者が器を貸せば、負荷が大きすぎて死んでいるか、儀式が完成しなかったかもしれない。この教会は安全だ。

しばし休んでいくとよからう」

「それは断る」

靴を履きながらグランディーナは即答する。靴の重さは尋常ではなかったが、彼女は無理に手を動かした。

「ここからゴヤスまでは走つても一日以上かかるだろうし、いまの私にはそれは無理だ。マラニオンにいる仲間合流したい。ポルトラノ、あなたなら、私をマラニオンに送り届けられるだろう？」

「気づいていたのか？」

「都市にだけ移動できる魔法の品があるそうだ。あなたの力ならばそんな物がなくてもたやすいだろう」

「ではこれでお別れだ。行く前にその棚にあるクイックシルバーを持っていくが良い。遙か西のダルムード砂漠に住む白き魔導師ギゾルフイに見せれば、そなたたちの力になってくれよう」

「ダルムード砂漠のギゾルフイ、覚えておこう」

やつと靴を履いて、グランディーナは立ち上がり、曲刀と鎧を取り返した。曲刀はもとより鎧の重さも生半可ではなかったが、置いていくのも気が利かない。

それから示された棚を見に行くと、その引き出しに拳大の紋章が所在なさげに置いてあった。

銀色の表には光と戦争の女神イシュタルの横顔が刻

まれている。ひっくり返すと「名もなき戦士たちの榮譽を讃えて」という文句が彫られていた。

「これはあなたが作った物か？」

「そうではないが、知った物か？」

「いいや。ただ、知ったふうなことを書く奴がいるものだと思っただけだ」

「それはそなたが考えるような芝居があった物ではない。この大陸の未来を託すべく贈る物だ。ギゾルフィとタルトに会った時にその意味を訊ねるが良い。わたしにはこれ以上言うことはない。さらばだ、グランディーナ。そなたたちのこれからの戦いに勝機があることを」

周囲の景色が歪み、またはつきりするまでに時間が要った。

グランディーナは森の外、町の郊外にいて、冷たい夜風が頬をなぶる。

「ポルトラノ、あいにくだが私は勝利のための祈りとやらは信用しない。運命は自分で切り開くものだ。そう教わったし、そうと信じている。祈りが、神が私の運命を決めるのどまっぴらごめん。それに、榮譽を讃えられる名もなき戦士たちの足下には大勢の名もなき敗者の死体が転がっている。一握りの英雄より

も名もなき勝者よりも、その方がずっと多いということも私は知っている。英雄たちの名も、名もなき戦士たちの榮譽も、大勢の敗者があつてこそ成り立つものだ。この大陸の未来など託されぬ敗者の方が、ずっと多い。あなた方、賢き司にその意味はわかるまい。そのことも気づくまい。一人ひとりの敗者の名をあなた方が知ることも未来永劫にあるまい。私が言いたかったのはそういうことだ。

だがこの紋章は利用させてもらう。あなたを遣わしたのが何者か、どんな意図があるのかは知らないが帝国を倒すためならば、私の目的を果たすために、解放軍も神の正義とやらも利用させてもらう」

辺りはまだ暗かった。

グランディーナはわずかに頭を巡らし、マラニオンの南、河の方に近づいていった。

細い煙が上がっている。

近づいていくと簡素な野営地が設けられているのがわかった。マラニオンは河を挟んで森からずつと外れている。悪霊の心配はないと踏んだのだろうか。

「どうした、シューメー？何かあるのか？」

聞こえてきたのはギルバルドの低声とグリフォンの鳴き声だ。

焚き火の周りにはウォーレン、ランスロット、カノープスが思い思いの場所に陣取って休んでいる。

その近くにたつたいま目を覚ましたばかりのポリュボスとアイギス、シーシュポスも落ち着かないようだが、昼間の強行軍がこたえたのか、三人が目覚める気配はなさそうだ。

「ただいま、ポリュボス、シューメー、アイギス、シーシュポス」

「グランディーナ?!」

すつ飛んできたギルバルドは血相を変えていた。

だが彼女は唇の前で指を立ててグリフォンたちのあいだに座り込んだ。

「静かにしてくれ。足腰も立たないほど疲れているんだ。明日の朝、皆に説明する」

ギルバルドはすぐに自分を取り戻した。その場に片膝をつき、黙って頭を下げる。どんな時にも失われぬであろうその落ち着きは、ほかの者にはない頼りがいを与える。

元ゼノビア王国の魔獣軍団長は希有な人柄の持ち主でもあった。

「肩を貸してくれ、ポリュボス」

言い終わらぬうちに、グランディーナは眠りに落ち

ていた。

「闇の力から離れよ、グランディーナ。闇の力はそなたを魅了する。闇はそなたを虜にするだろう。ミミルの泉に至った、わたしにできる最後の助言だ」

「いずれその力とは対決しなければならないまい。ご忠告痛み入ると言いたいところだが、私は大丈夫だ」

「ガレス皇子、魔導師ラシュデイ、その者たちに近づく時は心せよ」

グランディーナが目を覚ますと、東の山岳地帯に太陽が顔をのぞかせていた。

その光を背景に真っ赤な翼が生える。

「早起きだな。まだみんな寝てるぞ」

「習慣だ」

立ち上がると、足下の鎧を蹴飛ばした。疲労はかなり回復していたが、いつもの力を出せそうにない。手足を伸ばしてみたが、鈍い感じが取れなかった。

「カペラとの戦いは俺たちに任せておけよ。昨日の晩、南西の方から咆哮とは取れない叫び声が聞こえた。どうせおまえが絡んでいるんだろう?」

「そうだと云つたらどうかするの?」



「どうもしないさ。おまえは俺を負かした数少ない奴だ。信頼してるからな」

カノープスが携行食糧を投げてよこした。干し飯を棒のように固めた物で、お世辞にも美味しいとは言えない。腐りにくくて日持ちするのだけが取り柄だ。

「あなたが私以外に負けたことがあるとは意外だ」

「俺だって万能じゃないんだ、得手不得手つてものがある。だけど、その『私以外』って言い方はどうにかならないのか？ まったくいやみな奴だなあ」

「事実は事実だ。顔を洗ってくる」

「ギルバルドの言つたとおりだな。ずいぶんと疲れしているようじゃないか」

「まだ本調子ではないただだ。大げさにするな」

「俺は事実を言つてるだけさ。おっと、もつとうるさいのが起き出したぞ」

「グランディーナ、いつの間に来たんだ?! いままでどこにいた？ 身体は大丈夫か？ いったい何があつたんだ？」

いつもの彼女ならば、ランスロットには手を触れさせもしなかつただろう。

だが、今朝は分が悪かつた。

逃げられず、まるで小さい子どものように彼女は抱

きしめられてしまった。

一瞬身体を堅くすると、ランスロットはすぐに離れたが、今度は腕をつかんだまま、自分は片膝をついて見上げてきた。

「すまない。また君に怒られそうだな。だがこんなに気をもまれたのは初めてだ。何があつたのか話してくれるな？」

「カペラを倒してからでは駄目なのか？ 皆に聞かせたい話もある」

「そう堅いこと言うなよ。どうせみんなにだつて全部話す気はないんだろう？ 俺たちに少しぐらい話してくれてもいいんじゃないのか？」

「そうですね。待たされた分の埋め合わせということではいかがですか？」

ウオーレンが珍しくおどけた調子で同調する。

「ならば、要点だけ話す。カペラの召喚した悪魔を賢者ポルトラノと召還した。私を野営地からミナスシレイスまで召喚したのもポルトラノだ。あなたたちが来る途中で森の中に教会を見たのなら、そこで儀式をやっていた」

話しながら焚き火の方に戻ると、もう火は燻くすぶつているだけになつている。

ギルバルドがグリフォンとコカトリスの世話をしていた。彼はウォーレンとランスロットにも携行食糧を渡すと、焚き火を踏んだ。

「森の中の教会ついでと、あの尖塔かな。いたのがわかっていれば拾っていつてやったのに」

有翼人の視力は人間より数倍優れている。教会に気づいたのはカノープスだけだったが、マラニオンまでの距離を考えて先を急いだのだ。

「召還した悪魔というのはサタンのことですか？」

「そうだ。よく知っているな」

「アラデイが報せに来たのです。カペラが召喚した悪魔がサタンだと。あなたがいなかったので我々が替わりに聞いたのです」

ウォーレンの最後の言葉にグランディーナは一瞬だけ渋い顔をしたが、すぐにいつもの様子に戻った。

「サタンとわかっていて、よく出てきたな。そいつがいたら、あなたたちだけでは太刀打ちできなかつたろうに」

「かなわないとわかって俺たちを連れてくるつもりだったのか？ おまえ、その計画は無茶苦茶だぞ」

「サタンは私が引き受けるつもりだった。カペラだけなら問題にもなるまい」

ランスロットはカノープスと顔を見合わせた。

魔法使いの攻撃は確かに恐ろしいものだが、反面、守りが弱いのは有名な話だ。騎士の剣を受ければひとたまりもないだろう。グランディーナの言い分にも一理あるわけだ。

「君はまた自分をいちばんの危険にさらすつもりだったのか？ シリウスから受けた傷もまだ治っていないだろう」

ランスロットがため息混じりに咎めた。

「小言はサタンと戦えるようになったら言え。危険と言うのが、相手の力を考えたらこれ以上、確実な方法があるか。それともあなただったらどうすると言うのか、聞かせてもらおうか」

「そうランスロットを困らせることもありませぬ。彼の言い分は感情論かもしれないが、その気持ちは我らも同じ。」

だが、サタンにかなわないからと言って、帝国より圧倒的に弱い立場の我々が不用意に立ち止まるわけにもいくまい。先へ進むための最善の策、常に考えながら進まねば」

珍しくギルバルドが饒舌に語った。

「さて、そろそろ出発しますか？」

「待て。水浴びをしてくる」

結局、彼女らがゴヤスに向けて発ったのはそれから一時間後だった。

グランディーナたちと対峙した時、黄玉のカペラはひどく狼狽うろたえていた。

仕える部下もおらず、己の力の源も失って、一見、弱々しい老人のようだ。

「おまえたちが噂の反乱軍か。どうだ、このわたしと取引をしないか？」

「あなたに反乱軍呼びわりされる覚えはない。それにもう一度サタンを召喚させる暇を与えるつもりもない。覚悟しろ、カペラ！」

グランディーナの言葉に呼応して、ウォーレンが杖を、ランスロットが剣を、カノープスが鎚を、ギルバルドが鞭をそれぞれ構えた。

「反乱軍の小娘が、ちよつとシャローム地方を落とすたくらいで凶に乗りおつて！ クロリーアの奴などいなくても、ラシュディさまから、いただいたこの魔力で、おまえたちを一掃してくれるわ！」

「彼に呪文を唱えさせるな！」

カノープスが真っ先に殴りかかった。カペラはその

攻撃を避けたが、体勢が崩れる。

魔法は一度に複数の敵を殺傷するだけの力を持つているが、強力なものほど容易に唱えられないという制限がある。また術者の技量によって、一日に唱えられる数、一時間に唱えられる数にもある程度の上限があるのだ。

ギルバルドの鞭がカペラを捕らえた。

そこにランスロットが斬りかかり、ウォーレンが呪文を唱える。

魔法使いは防御にまわると圧倒的に弱い。

一撃でカペラはよろめき、ランスロットにもう一太刀くらつて倒れた。

「思い——」

それがカペラの最期だった。

一行がゴヤスを離れ、アラゴアスで解放軍の面々と合流したのはそれから二日後のことである。ポグロムの森を抜けてゼノビアに至る街道は、ここからさらに徒歩で二日の距離だ。

「途中で何度か悪霊に襲われました。カペラを倒したというのに、なぜ彼らには静かな眠りが許されないのでしょうか？」

「悪霊を利用しているのはカペラだけじゃない。それに虐殺を行った張本人が生き残っている限り、その魂が安らぐことはあるまい」

「アプローズ男爵は帝国でも高い地位に就いているはずです。おそらく、罪状はボグロムだけには留まりません」

また解放軍にはゼノビア王国騎士団の生き残りが加わった。ヴォルザーク島に逃れたランスロットらとは別の逃亡経路をたどったそうで、五人組のリーダーはポリーシャ・プレージという槍騎士の女性だった。

「ゼノビア奪還にぜひ、私たちも加えていただきたい。くお訪ねにあがりました」

「あなたたちを歓迎する」

そうして、否が応でも解放軍の中でいよいよゼノビア攻略の思いが高まっていったところ、グランディーナたちは思わぬ寄り道をさせられることになる。

そこはデネブの庭。南瓜の豊かに実る山間の土地。